

国語教師・青木幹勇の形成過程（４） —NHK「ラジオ国語教室」との関わり—

茨城大学教育学部 大内 善一

キーワード：青木幹勇、「ラジオ国語教室」、話しことば、力量形成、教材作り

1 研究の目的

青木幹勇は、大正15年10月に教員検定試験に合格し、19歳で宮崎県高千穂小学校に赴任してから昭和47年3月に東京教育大学附属小学校を退官するまでのほぼ半世紀余を教師として勤めている。昭和期の大半を教師として過ごしていることになる。青木は上記附属小在任中の昭和45年6月より授業研究サークル「青玄会」を結成している。翌年7月には同会の機関誌『国語教室』も創刊して自ら編集の任に当たり、平成12年7月現在で350号を数えている。また、附属小退官後の今日まで全国各地の研究會に招かれては現地の児童を相手に実地授業を公開している。

青木が卓越した国語教育実践者であることは、上記のような活動の外に、『青木幹勇授業技術集成』全5巻(明治図書)をはじめとする数々の著作を通して国語教育界に広く知られているところである。

前回の第98回の本学会においても、青木幹勇の昭和期全体を貫く文字通り半世紀を超える文章表現指導実践研究史を辿ることによって、一人の国語教師における文章表現指導観の発展深化のプロセスを明らかにした。そして、その実践研究史から私たちが学ぶべきは、青木幹勇の授業実践の典型を取り出すといったことではなく、子どもと共に学び、様々な実践の試行錯誤を行っていかうとする教師としての学びの姿勢である。さらに、青木が芦田恵之助や生活綴り方教師・木村寿などの先人から謙虚に学びつつも、その歴史的な限界を乗り越えていかうと

する批判的摂取の姿勢を取り続けてきた点に、今後に生かしていくべき課題が見出せると結論づけた。

一人の国語教師の歩みとして、青木幹勇が行ってきたこのようなたゆみない実践研究は誠に稀有な出来事といってよい。それだけに、青木のこのような歩みが国語科教師教育の研究にとっても貴重な拠り所となっていくはずである。

本発表では、前々回の第97回の本学会での発表に続いて、青木幹勇のNHK「ラジオ国語教室」との関わりに目を向けて、この「ラジオ国語教室」が国語教師としての青木の形成に関わったと目される諸要素について考察を加えていくことにする。

2 これまでの研究の経過

発表者は、今回の研究に関わる研究としてこれまで、①「国語教師・青木幹勇の形成過程(1) - 生活綴り方教師・木村寿との関わり -」(『秋田大学教育文化学部研究紀要・教育科学』第54集、平成11年)、②「国語教師・青木幹勇の形成過程(2) - 国語教育の先達・芦田恵之助との関わり -」(『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第21号、平成11年)、③「国語教師・青木幹勇の形成過程(3) - 国語教育の先達・古田拓との関わり -」(『秋田大学教育文化学部研究紀要・教育科学』第55集、平成12年)を発表してきた。これらの研究は、本学会においても口頭で発表したものをまとめたものである。

また、これらの研究以外にも、青木幹勇の国語教育実践研究史に関わる研究として、④「文章表現教育の向かう道」(田

近洵一編『国語教育の再生と創造』平成8年2月、教育出版)、⑤「『第三の書く』の検討」(拙著『作文授業づくりの到達点と課題』平成8年10月、東京書籍)、⑥「『フィクション作文』の魅力を探る(1)～(4)」(青木幹勇編『国語教室』312～314号、319号、平成9年5月～7月、同12月)、⑦「青木幹勇国語教室の『書くこと』に関する考察 - 『書くこと』の導入から『第三の書く』への発展過程 - 」(全国大学国語教育学会編『国語科教育』第45集、平成10年3月)、⑧「国語教師・青木幹勇における文章表現指導観の変遷 - 『生活綴り方』から『フィクション作文』への転回過程 - 」(第98回全国大学国語教育学会、課題研究・第3分科会『書くこと(作文)の教育』研究の歴史と展望)における口頭発表)などを発表してきた。

①から③までの研究は、一人の国語教師・青木幹勇を対象を据えて国語教師としての成長過程、力量形成過程を明らかにしようとしたものである。④から⑧までの研究は、文字通り、青木幹勇という一人の国語教師の国語教育実践研究史の意義を明らかにしようとしたものである。これらの諸研究のうち、今回の考察は、前者の研究に継続するものである。

3 NHK「ラジオ国語教室」への出演・指導担当

NHKの学校放送「ラジオ国語教室」が始まったのは、昭和28年4月(青木が出演したのは、この年から昭和53年までであった。)からであった。青木幹勇は、この放送に開始当初から出演して指導を担当していた。開始当初、放送を担当するメンバーは、各学年2名ずつの12名であった。青木によれば、これらのメンバーの大半は放送に関して「ずぶのしろうと」だったようである。また、当初は、「放送内容」や「放送の構成」の十分に確立してはいなかったとのことである。昭和26年の「小学校学習指導要領国語科編(試案)」を土台として、

「電波を通して正しい共通語を、耳からじかに指導して」いくこと、そして、「日本の子どもたちの話す力、聞く力を育てよう」というのがこの放送のねらいであった。

この放送は、「スタジオに数人(普通6人)の子どもを連れてきて小型授業形式で放送」された。放送が始まると、次々と様々なつまずきが生じたようである。まず、スタジオに連れてきた「子どもたちをどう扱っていくかということにてこずって、一番かんじんな全国の聴取児童をおいてけぼりにすることになりがち」であったという。放送に携わっているメンバーの研修会では、「もっと教室の子どもを意識しろ」という反省がしばしば出されたようであるが、その技術をものにするにの青木は、「二八、二九、三十と三年ぐらいかかった」ようであると述懐している。

また、放送に際しては、「放送者自身のことばが正しいことばであること」はもちろん、「マイクの前の六人の子どもたちに、実地の指導をし、この指導を通して、聴取児童によびかけていく」ことが求められ、加えて「聴取児童の話したことばの指導に一役」買うことが求められていた。そのためにも「放送を通してスタジオでの子どもたちの話しことばの育っていくすがたを現出」させなければならなかったのである。

こうした課題を解決するために、青木たちは担当のメンバーたちと、後述するような「研修会」や「反省会」を持って、指導の力量向上を図るべく努めていったようである。(以上、青木稿「ラジオとテレビが育てた国語教師 - 話しことばの指導の側面 - 」の中から。東京教育大学附属小学校初等教育研究会編『教育研究』昭和27年1月号、後に『青木幹勇授業技術集成4話し言葉・作文』昭和51年8月、明治図書、に収録。)

4 「ラジオ国語教室」研修会を通して昭和28年の放送開始当初は、青木幹

勇によれば、指導担当者の中で様々な課題が出てきたようである。その対策としてまず行われたのが、担当者たちの「ことばなおし」であった。研修会ごとに「アナウンサーに来てもらって、アエイウエオアオの発音から、話しことばのポーズや、イントネーションの練習」をやったり、「録音を試聴して子どもへの呼びかけ、子どもの応答のとりあげ方、助言のことば、助言のしかた」などの工夫が行われたとのことである。

発表者の手元に青木幹勇が自ら作成した放送用台本がある。氏から貸与していただいたものである。これらの放送台本の詳細については後述するが、この中にNHKの教育部学校課が制作した「昭和32年度ラジオ国語研修会・中学年部会実施計画表」なるものが含まれている。3頁のパンフレットであるが、この中に当時の研修会の概要が記されているので取り上げておくことにする。

この年度の研修会の開催日時は、5月6日、6月24日、9月30日、11月25日、1月20日、3月17日、の6日間である。いずれも月曜日午後4時～8時までの4時間が設けられている。参加者の名前に、石黒修（教育評論家）、倉沢栄吉（文部視学官）、木藤才蔵（文部事務官）、泉節二（東京都目黒区菅刈小学校長）、相原永一（東京学芸大学附属豊島小学校）、青木幹勇（東京教育大学附属小学校）、水谷五郎（東京都新宿区淀橋第四小学校）、千葉かおる（お茶の水女子大学附属小学校）、小塚芳夫（東京都渋谷区大向小学校）、榎本隆治（東京学芸大学附属追分小学校）、地引はな（東京都台東区育英小学校）の11名が記されている。この頃は、実際の指導が8名となったようである。

研修会の内容は、始めに「番組の試聴」をして「意見交換」が行われている。検討する観点として、「1 ねらいの出し方、しぼり方／2 題材の選び方（場面の設定、用語など）／3 構成 ○放送の山がうまく盛り上がっているか。○ドリルは、ど

のように実施されたか。○指導や助言／4 その他」などが設定されている。

この後、「教材研究」として、「各大単元につき、今までの放送台本を分析研究して整理し今後の参考資料として役立つものを作成する」作業が行われている。作業の振り分けは、第3学年分が「5月 聞きわけ方、聞きとり方／6月 擬声・態語・話し方／9月 朗読、あいさつ／11月 たのみ方、うけこたえ、相談／1月 劇の練習／3月 感想発表、話し合い」、第4学年分が「5月 聞き方／6月 家のことば、学校のことば、流行語、ていねい語／9月 話し方、感想発表、話し合い／11月 発音／1月 朗読、劇の練習／3月 あいさつ、応答、相談」となっている。これらの単元ごとにグループでの研究が行われていったようである。

5 放送台本（＝教材）の自主作成を通して

研修会による共同研究もさることながら、青木幹勇の国語教師としての力量形成に大きく貢献したのは、毎回の放送に使用する「放送台本」作りにあつたと思われる。勿論、実際に生の声でスタジオと全国の子どもたちに話しかけていく、その実際の話しことばの指導自体も青木にとっての話ことばの習練に計り知れない成果をもたらしたことであろう。しかし、残念ながら、手元に当時の放送の録音テープは残されていない。したがって、音声を通して青木の放送に関わる習練の成果を実証することは叶わない。

そこで、本発表では、手元にある青木自身の制作になる「放送台本」の検討を通して、青木の話しことばの教材作りの一端とその意義について考察を加えていくことにする。

青木から発表者の手元に貸与されている「放送台本」の冊数は、以下のようになる。

- ・昭和29年度用—14冊（第3学年）
- ・昭和31年度用—13冊（第3学年）

- ・昭和32年度用—13冊（第3学年）（他に、NHKの教師用テキスト『学校放送（2学期）』1冊）
- ・昭和33年度用—12冊（第3学年）（他に、教師用テキスト『学校放送』1学期用と3学期用の2冊）
- ・昭和34年度用—10冊（第3学年）
- ・昭和35年度用—10冊（第4学年）
- ・昭和39年度用—1冊（第6学年）

※以上の他に、青木以外の指導担当者の放送台本が13冊ほど混じって手元にある。

なお、青木がNHK「ラジオ国語教室」に出演していたのは、昭和28年から昭和53年までの25年間の長きにわたる。この間、最も長く担当したのが第6学年であったとのことであるが、この学年の「放送台本」は誰かに貸与したまま戻ってきていないとのことである。かなりの部数の台本が失われてしまったことになる。残念なことであるが、以上の残された「放送台本」に検討を加えていくことにする。

詳細については、本発表の中で、別紙資料に基づいて提示していくことにしたい。

6 「ラジオ国語教室」の反省を通して

先に見た「ラジオ国語教室」の研修会の際にまとめられた「反省記録」が残されている。昭和29年11月に開催された中学年部会の反省会記録である。NHKの「教育部学校課」がまとめたものである。全32頁からなる冊子である。この中には、指導担当者6名の反省が記録されている。この中の青木幹勇の反省記録の一端を以下に取り上げてみよう。青木の反省は、一人で14頁にわたる長いものとなっている。

「二、うつくしい花（四月二十四日放送）

- 1 この放送は、一、二学期を通じて一番よく出来たのではなかったかと思う。
 - a 構成に無理がなかった。
 - b 展開が多彩でおもしろく出来た。

- 1 歌（レコード）わたしの人形
 - 2 よびかけ（これは少々まずかったが）
 - 3 大人の冗漫な会話
 - 4 修飾語と被修飾語との関係の例
 - 5 とんち教室形式の採用など
- 2 放送全体がユーモラスに展開できた。

みんな、おもしろくやろうと意図しているが、まだそれが不自然で技巧が目立って拙い。

その点この放送は、割合に自然に出来た。」

もう一つの反省記録を取り上げてみよう。

「二、おしまいまで（九月十八日放送）

- 1 助動詞のはたらきを理解させ、語尾をはっきりさせる。
- 2 この回も二つの、寸劇をとり入れてみたが、どれもあまりピンとくるものでなかった。特に、語尾のアイマイをクローズアップしようとした。「とんちんかん問答」は、作りものに墮してしまった感があって赤面した。
- 3 質問形式の「話しかけの仕方」を強調したのだったが、どれだけ響いたか心もとない。しかし、常々考えていたことで、自信をもって話したのだった。三年生には程度が高かったかもしれない。でも、あまり長広舌にならない限り、また、聞き流さる懸念はあっても、こういう放送は、ことばの教育ではあってもよいと思う。「子どもの為のことば時評」という意味で。

（以下略）

このような反省記録が詳しく綴られている。青木の場合は、毎回の放送に関して、このような「反省日記」をつけていたようである。これらの反省記録も手掛かりにしながら、青木の教材作りの工夫と歩みを辿っていくことにしたい。